

皆んな我が身をもてあましている風である。ついには通路に横になる者もいたとか……
こうして常のように安眠出来ぬまゝにそれでも美しいだろう十和田湖を夢みて明日を待つのだった。

盛岡から十和田まで

7月18日

昨日から丸一日の汽車旅で、皆相当に参つている様子。改めて東北は遠いとの感を強くする。盛岡で小さな電車に乗換える。休暇で旅行中の学生も多い。初めはそれほどでもなかったが、だんだん土地の人が増えてきた。土地の人の話に耳を傾けると、聞きなれぬ外国語の様、東北弁の本場に来たかと思つた。中年の小母さんとなら、辛じて話が通じるが、お婆さんとは全然通じない。観光の町京都では乗物でお年寄りに席をゆずるのが常識の様に思えるが、旅先でしたことは「ええかつこ」どころか失敗だつた様だ。土地の人はお年寄りでも我々町の若者よりは丈夫で大きな荷物も平気で背負うのだから驚く。おいしそうな、もぎたてのトマトを持つていた小母さんの笑顔が目につく。言葉を聞いて、「おや、ここも日本かいなあ。」と思わずにはいられなかった私達は、真夏だというのに、セーターを着込んでも寒い空気に驚く他なかった。そうこうするうちに十和田南へ着き、ここからバスで休屋に向う。途中昨日からの乗物疲れと、バスの心地良い振動でガイドさんの声も子守歌に聞えてくる始末。ここで憶えているのは、たゞアカシアの木のみ。ロマンチックで、悲恋を思わせる木、誰れしも思いは同じか、歌声がどこからともなく起つてくる。発荷峠の展望台も私達にとつては展望台とはなつてくれなかった。いじわるな霧と雨は、私達に何も見せてくれなかった。恨めしく思い、又うとうとしていると、いつしか雨もやみ、和井内に近づくと私達も十和田を見ることが出来るようになった。眼下に開ける木々のなかに十和田湖が見えた時、目をとじ、首を振つていた者さえ起きだして「きれいやなあ」なんて勝手なことを言う。カーブするたびに湖が見え隠れする。それはさながら、十和田湖が恥じらいを持つて、私達に歓迎の挨拶をしているかの様だ。下り坂となつて、湖は目前にせまってくる。その湖の色は、私達の疲れをしばし忘れさせてくれた。

バス是和井内を通り抜け、湖を左方に見ながら進んだ。やがて秋田県から青森県へと、県境いの小さな橋を通過し、今夜の宿十和田観光ホテルへ到着した。